
僕は銀の竜に

宮下あゆむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は銀の竜に

【Nコード】

N3740B

【作者名】

宮下あゆむ

【あらすじ】

人は竜と重なり世界を変える物語り

1話 ユウカナリア

第1話

「平凡」

カッラカッラ島は人口三十人の小さな島だ。

カッラカッラ島は機械工業が特化していて、そこらの都市には負けない

カッラカッラ島の真ん中にはおつきい山がある

山には銀色の竜が棲んでいるという噂がある。

僕は、工場に働く、ケイトだ。

今からの話しは僕が銀色の竜に出会う前の話した。

11月04日にケイトは 工具の一部が無くなっていたので、船に乗り、本島に向かった。

船では本島にいくまでに、二時間はかかってしまうが飛行機やヘリコプターは無いので仕方がない、ケイトはポケットに入っている、指輪を握り締めると、ケイトの頭に、ザアザアっと、ノイズが走った。

（めざ…こ…きけ ぎ ん のる…きた）

「またか、またこの声か」

ケイトは船の甲板に上がった。

「何だろっ、三年前の記憶がないのとの関係があるのかな…」

ケイトが甲板で悩んでいると、船内アナウンスが聞こえた。

「本島ユウカナリアに到着しました、お客様はお忘れ物なきよう、ご注意を」

「いつもより早く着いたな」

船から降り、ケイトは倉庫の方へ歩いていっていると、頭に水がかかった。

「わっ、冷た」

ケイトが頭を触り、上をみると幼さが残る少女がいた。

「ごめんなさい、かかりました？」

少女は倉庫の上からケイトを見下ろした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3740b/>

僕は銀の竜に

2011年1月18日15時07分発行